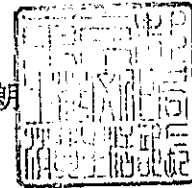




28生消生第528号
平成29年2月14日

公益社団法人 日本歯科衛生士会
会長 武井 典子 様

東京都生活文化局
消費生活部長 三木 暁朗



子供に対する歯ブラシの安全対策について（提案・要望）

日頃より、東京都の消費生活行政に御理解、御協力をいただき、厚く御礼を申し上げます。
さて、東京都は、昨年7月から消費者団体、事業者団体、学識経験者等で構成する「東京都商品等安全対策協議会」において、「子供に対する歯ブラシの安全対策」について検討してまいりました。

この度、協議会から東京都に対し、別添のとおり報告があり、子供が歯ブラシをくわえたまま転倒するなどして喉を突くなど、口腔内を受傷する重症事故が発生している実態が明らかにされ、安全確保に向けた取組が必要であるとの提言がなされました。

歯ブラシによる口腔内の負傷は、口腔が脳に近いことから、傷害が脳に及ぶ危険性があり、また、歯ブラシが突き刺さることにより、口腔内の菌が組織内に入ると重症事故に繋がる危険性もあります。子供の歯ブラシによる喉突き事故防止を図ることが喫緊の課題であり、この報告を受け、東京都は、関係事業者団体等に対し、早急に安全対策を講じていただくよう、提案・要望を行うことといたしました。

貴職におかれましては、下記の事項について会員に周知を図り、推進されますよう、提案・要望いたします。

記

1 消費者の行動に結び付く具体的な注意喚起

協議会の調査結果から得られた消費者の使用実態やヒヤリ・ハット及び危害経験が起きた状況等を踏まえ、より具体的な注意喚起を行い、歯ブラシによる喉突き事故防止に向けた行動に結びつく啓発を行っていくこと。

また、幼児期の子供はちょっとしたすきに予期しない行動をするので、保護者の見守りだけで事故を防止することは困難であることも併せて周知していくこと。

[歯ブラシによる喉突き事故防止のための注意喚起事項]

- 喉に突き刺さらない歯ブラシや喉の奥に入らない歯ブラシなど、安全対策を施した商品は、受傷のリスクが低減される。歯ブラシを購入する際に、特に事故の危険性の高い3歳前半までは、安全対策を施した歯ブラシを選ぶようにする。
- 安全対策を施した歯ブラシを使用することにより、受傷リスクは低減されるが、ヒヤリ・ハット事例もあり、必ずしも安全とは言えないことから、安全対策が施された歯ブラシを使用する場合でも保護者が必ず見守る。特に事故の危険性の高い1歳から3歳前半は見守りを確実にする。
- 歯ブラシは、転倒等により発生する喉突き防止等の安全性と清掃効果をどの程度重要視するかが課題であるが、子供が使用する歯ブラシは喉突き防止の安全性を重視するため、清掃効果が望まれる保護者が仕上げみがきで使用する歯ブラシと使い分けをする。
- 立位よりも座位の方が受傷リスクの低減が図れることから、歯みがきは床に座って行う。また、座位であっても転倒により喉を突く危険性があることから、子供が歯みがきしているときは保護者が必ず見守る。
- 台の上に乗ることにより、転落のリスクが高くなるため、歯みがきは台から降りて行う。
- 子供が注意を理解できるようになったら、子供にも歯ブラシの事故の危険性や注意事項について教える。
 - ・ 歯ブラシはおもちゃ代わりにしない。
 - ・ 歯ブラシを口に入れたまま遊んだり、歩いたり、走ったりしない。
- 仕上げ用歯ブラシ及び成人用の歯ブラシは子供に持たせない、手の届くところに置かない。
- 歯みがきを行う場所、生活環境を見直し、子供に対する事故のリスクを低減させる。

[居間]

- ・ ソファから転落 ⇒ ソファなど不安定な場所で歯みがきをしない。
- ・ 家族とのぶつかり ⇒ 動き回らない、周囲に注意する。
- ・ クッションへの躓き ⇒ 子供の動線に物を置かない。
床に電化製品のコードを這わせない。
- ・ ながらみがきによる転倒・衝突 ⇒ テレビやパソコンを見ながら歯みがきをしない。

[ダイニング]

- ・椅子からの転落 ⇒ 歯ブラシを持ったまま椅子の上に立ったり、飛び降りたりしない。

[洗面所]

- ・踏み台からの転落 ⇒ 洗面台に届かない場合は、うがいをするときだけ踏み台を使用し、歯ブラシを置いてから踏み台に乗る。

[廊下]

- ・廊下での転倒、衝突 ⇒ 子供に歯ブラシを持たせたまま歩かせない。

[寝室]

- ・布団での躓き ⇒ うがいをするため場所を移動するときは、歯ブラシを持たせたまま歩かせない。歯みがきが終わったら歯ブラシは保護者が片づける。

○ 歯ブラシだけでなく、箸やフォークなど、喉突きの危険性のある日用品も、口に入れたまま遊んだり、歩いたり、走ったりしない。

2 消費者への効果的な普及啓発

下記の観点も踏まえ、消費者に効果的な注意喚起を行っていくこと。

注意喚起に当たっては、親の世代が入れ替わることや、子供の成長は速く、状況は数か月で変化していくことを考慮し、状況の変化のペースに合わせて、繰り返し継続していくこと。

(1) 歯ブラシによる子供の事故の危険性と事故防止のための注意事項については、消費者に広く注意喚起できるよう、あらゆる機会を捉え、様々な媒体を活用した広報を行うこと。

(2) 事故の危険性の高い1歳から3歳前半の子供を持つ若い世代の多くは、インターネットやソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）を利用していることから、インターネットやツイッター、facebookなどのSNS、例えば「子育て応援サイト」や「子育て応援ナビ」などを有効活用し、ユーザー側からの情報発信を促進するなど、対象に届く効果的な広報を展開していくこと。

(3) 子供向けのイベントや子育て支援イベントなど、子育て世代が多く集まるイベントと連携し、さらに、協議会の実験映像や写真などを活用するなどし、歯ブラシの事故の危険性を周知するとともに、購入時における安全な商品の選択、子供の歯ブラシの

取扱いに係る注意事項などについての普及啓発を図ること。

- (4)啓発は保護者だけでなく、祖父母や周囲の人も含めた幅広い層に対し、繰り返して行っていくこと。
- (5)乳幼児健診等の機会を活用した啓発を行うこと。また、妊産婦検診、父親・母親学級、新生児訪問等も活用し、早い時期から情報が行き届くような普及啓発を積極的に図ること。健診時は多くの注意事項が保護者に伝達されるため、歯ブラシに関する注意事項が埋もれずに、確実に伝わる方法を工夫すること。
- (6)地域の歯科医師会に事故情報の周知と注意喚起の発信を働きかけること。